

多義語「ツク」(突・衝・ 撞・搗・吐)の意味分析

鈴木智美

1 多義語「ツク」

1.1 分析の対象とする範囲

「ツク」という音形をとる動詞には、その補語が伴う格助詞の違いから、少なくとも次の2種類があると考えられる。ひとつは補語の名詞句がガ格とヲ格を伴うものであり、もうひとつはガ格とニ格を伴うものである。前者はたとえば「(私が)キューで球をツク」「漁師がモリで魚をツク」という場合の「ツク」。後者は「電車がホームにツク」「服にしみがツク」という場合のものである。

両者は同じ「ツク」という音形であるものの、本稿で参照した辞書の中には、両者をひとつの見出し語のもとにまとめ一語として記載したものはない。両者の意味の間に関連性が皆無であるとは言い難いが、本稿では、考察の対象を前者の「～ガ～ヲツク」という文型をとるものに限ることにする。

1.2 多義性を持つ語か単義語か

ある語に対し複数の多義的別義を認める基準は、それら複数の意味が、それぞれに関連語(非両立関係にある同位語、反義語、反対語、類義語、上位語など)が異なり、さらにその属する意味分野が異なるかどうかであると言われる(柊山(1995)(講義ハンドアウト))。

今、暫定的に「ツク」に複数の意味があると考え、この基準に従って考えてみる。まず『類語国語辞典』を見ると、「ツク」は「2. 変動」という意味分野の中で「22 離合-223 接触」という下位の意味分野に、また「3. 行動」という意味分野の中で「38操作-387 押し・388 突き・389 打撃」という下位の意味分野に、そして「4.

心情」という意味分野の中で「46闘争-464 攻防-a攻撃」という下位の意味分野にと、三つの異なる意味分野に記載されていることがわかる。

また、複数の意味それぞれの類義語を考えてみると、「ヤリでツク」という場合には「サス、ツラヌク」、「球をツク」の場合には「ハジク、ウツ、アテル」、「頬杖をツク」の場合には「アテル、ササエル」、「痛いところをツク」の場合には「指摘スル、攻メル」などとなり、それぞれの意味を取り巻く関連語が異なっていることがわかる。

しかし、これらの複数の意味が単に文脈的に変容したものにとすぎず、ひとつの意味にまとめられる可能性はないだろうか。池上(1975:135-136)は、暫定的に出された複数の意味についてある共通の意味次元が見出され、かつ、それらの意味でその次元の全域が覆われるのなら、それら複数の意味はひとつの一般の意味にまとめてよいとしている。上で観察された複数の「ツク」の意味に対して、たとえば「何らかの対象に向けて行われる人の行為」というような共通の意味次元を考えたとしてしよう。しかし、これら「ツク」の複数の意味だけでその次元の全域を覆うことは無理である。

以上から、本稿で分析の対象としようとする「ツク」は、複数の異なる意味を持つ、即ち多義性を持つ語であるが、それは単義語が文脈的に変容したものではないということが確認できる。

1.3 多義語か同音異義語か

国広(1982:97)は「『多義語』(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と、また「『同音異義語』とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである」と定義している。1.2 では「ツク」に複数の異なる意味が存在することが確認されたが、それらの意味の間には、何らかの意味的な関連があるだろうか。

まず、諸種の辞書において、この「ツク」が見出し語としてどのように分類されているかを見とめることにする。「ツク」に用いられる五つの漢字表記を、便宜上それぞれ違う意味を表す時に使い分けられるものと考え、それをを用いて(図1)に示す。(図の形式は国広(1982:129 図20)に従った。ただし「突」は「衝」あるいは

は「撞」と交替の可能性がある。)

	突	衝	撞	搗	吐
『岩波国語辞典』第五版	—————				
『新明解国語辞典』第四版	—————				
『改訂 新潮国語辞典』	—————				
『広辞苑』第四版	—————	—————	—————	—————	—————
『例解新国語辞典』第三版	—————	—————	—————	—————	—————
『新和英大辞典』第四版	—————	—————	—————	—————	—————
『三省堂国語辞典』第四版	—————	—————	—————	—————	—————

(図1)

全体をひとつの多義語として扱うものと、「搗」「吐」で表記されるものをそれぞれ別語として扱うもの、また、五つを別々の同音異義語として扱うものと、三つの分類型が見られる。

多義語か同音異義語かを区別する基準として、国広(1982:107-108)は「語源は無関係であり、中心的なものは意味の近親性に対する話し手の直観である」とし、また「同音意義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことである」と述べている。上記の辞書でそれぞれ異なる扱いがされているのと同様に、母語話者の直観からも「搗」「吐」の漢字表記によるものを別語とみなすかどうか、判断にゆれが生じるであろう。

本稿では、これらの漢字表記で表される複数の意味の間の意味的な関連性は大きいと考え、「ツク」をひとつの多義語とみなす立場をとる。そして、それら複数の多義的別義の間に見られる意味的な関連を、比喩的転用(国広1982:118)などによるものと位置付けていく。

2 「ツク」の意味分析

2.1 多義的別義[1] (基本義) : <棒状のもの><先端を><他のあるものに><瞬間的に><接触させ><衝撃を与える> (これが多義的別義の中で最も基本

的なプロトタイプの意味であるとの認定については3章で詳述する。また本稿でこの種の意味を「基本義」と呼ぶことは柗山(1992:188)の用語に従った。)

- (1) キューで球をツク。
- (2) モリで魚をツク。
- (3) 犯人は傘で袋をツイて、サリンを発生させた。(インフォーマントの作例より)
- (4) 下山さんは十六日にスペイン中部アビラの闘牛場で三百キロの闘牛にあごを突かれた。(邦人闘牛士が重傷 95.8.22 中日新聞)
- (5) 同校やナイロビ日本大使館によると、浅野校長が車で正門に到着した際、正門向かいのトウモロコシ畑に潜んでいた二人の男が飛び出し、運転手に短銃を突き付けて降りるように要求、空に向けて一発威嚇発砲した。(日本人学校長撃たれ死亡 95.8.17 中日新聞)
- (6) 真由美は代理母になった事情を説明しようとするが、雅人は拒絶する。もみあったはずみで真由美は階段から突き落とされ、ねんざして入院する。(週間テレビガイド 95.9.1 中日新聞)

これは、具体的な人間の動作を表すものであるが、その動作には、ある道具が必要である。(ビリヤードの)キュー、モリ、傘、角、短銃、人の腕、それらに共通の意味特徴は細長い<棒状のもの>であるということである。また、それをある対象に向けて<接触させる>のだが、野球のバットで球を打つ時のように、その<棒状のもの>の「側面」を対象に当たったのではツクことにならない。「打つ」あるいは「たたく」ことになってしまう。棒状のもの<先端>を接触させなければならない。動きの向けられる対象となる<他のあるもの>は、生物もあれば無生物もあり、動くものもあれば動かないものもある。接触した後にそれがどうなるかも、落ちる、はじかれる、揺れる、倒れる、破ける、刺される、貫かれる、ひびが入る、衝撃を受けるが動かないなど、様々である。

しかし、よく考えれば、ツイたあとの状態は、大きく分ければ二通りしかない。つまり、その<棒状のもの>が、瞬間的に対象物に当たって離れるか、あるいは対象物の中に入ってしまうか、どちらかである。<棒状のもの><先端>が対象物に接触した後、離れもせず中に入りもせず、そのままその表面でぴたっと止まって

しまうことは、磁石か或いは瞬間強力接着剤の働きでもなければ起こらないだろう。(1)の文脈では、キューは球に接触した後、当然それをはじくことになるだろうし、(2)の文脈では、モリで魚をはじくことは考えられず、当然刺すか貫くか、モリの先端は魚の中に入ることになるだろう。ツイた後の状態は、文脈によってどちらかに変わる。また、ツイた後の状態をひとつの共通の意味次元と考えると、この二つの状態でその全域が覆われることから、この二つの場合の意味の違いは、この[1]の基本義が文脈的に変容したものであると考えられる。

また、ツイた後<棒状のもの><先端>が対象から離れるのか、あるいは対象の中に入るのか、その区別を意義特徴に加える必要のないことは、(5)の「突き付ける」と同様「ツク」をもとにして、非常に多くの複合動詞が生産的に作られることを見てもわかる。(5)の「ツキ付ける」(6)の「ツキ落とす」の他「ツキ離す」「ツキ飛ばす」「ツキ倒す」「ツキ刺す」「ツキ立てる」「ツキ破る」など多数ある。つまり、ツクはあくまで対象に接触し、それに何らかの衝撃を与えるというところまでを表しているのであり、対象にどのような影響を及ぼすことになったのかを具体的に指定しないものと考えられる。ツイた後対象がどうなるか、それら具体的な影響は、複合された後続の動詞が表す。ここでは、「ツク」が対象に及ぼすここまでの作用を<接触し><衝撃を与える>とまとめることにする。柴田・国広他(1979:222)も「(棒状のもの)先端が他のものの内部に入っても入らなくてもよい。ツクはともかく『棒状の物の先端を他のものに接触させる』動作を行なうのである。」と分析している。

さて、柴田・国広他(1972:222)は、「ツクは<棒状のもの(X)をまっすぐ速く動かし、その先端を他のもの(Y)に接触させ、それ(Y)に衝撃を与える>ということである」と分析している。この動作が、対象に何らかの衝撃を与えるものであることには異論はない。しかしここでは、この「まっすぐ速く動かし接触させる」という意義特徴を、<瞬間的に><接触させる>という意義特徴に集約させたいと考える。ツクが瞬間的な動きを表すことは、ツクと「押す」を比較してみるとよくわかる。

(7) ゆっくり押す。

(8) ?ゆっくりツク。

?はそれが不自然な表現であることを示す。ツク動きそのものは、ゆっくり時間をかけて行うことはできないようである。

- (9) すばやく押す。
- (10) すばやくツク。

すばやく行うことはどちらも可能である。

- (11) ずっと押している。(継続状態)
- (12) *ずっとツイている。(継続状態)

*はその表現が不可能であることを示す。ツク動きの継続状態は表せない。ただし何度も反復して行っている意味ならば(12)も可能であろう。

- (13) 押してみたが手応えがないので、もっと押してみた。
- (14) ?ツイてみたが手応えがないので、もっとツイてみた。

ツクは、一度ツイた後に、そのまま継続して行い得る動きではなさそうだ。(14)は次のように言えば自然である。

- (15) ツイてみたが手応えがないので、もう一度ツイてみた。

このことから「押す」のは、ゆっくりでもすばやくでも行い得る継続的な動作であり、対象に接触した後もそのまま続けることのできる動作であることがわかる。一方、ツクは瞬間的な動作であり、ゆっくり行うことはできないし、対象に接触した後はもはやそのまま継続することのできない動作である。なお国立国語研究所(宮島達夫)(1972:239)では、「おす/つく」を比較して「この両者のあいだには、いくつかのちがいがあろうだが、その1つとして、動作を加える際のいきおい、圧力がちがうということがある」としている。しかし、勢いよく強く「押す」ことも、軽く「押す」ことも可能であるし、勢いよく強くツクことも、軽くツクことも可能であるので、両者の違いを「いきおい、圧力」の違いに代表させるのは的確で

はないと思われる。むしろツク動きを特徴付けているのは、それが<瞬間的な>動きであることだと考える。

柴田・国広他(1972:222)の分析「(棒状のものを)まっすぐ速く動かし接触させる」のかわりに、ツクの意義特徴として<瞬間的に><接触させる>ことを挙げれば、当然、柴田・国広他(1972:222)でも指摘されているように「×くねくねとツク」ことはあり得ない。<瞬間的>であれば、くねくねしている時間はない。最短距離を「まっすぐ」に動くのみである。また、接触が<瞬間的>であれば、その一瞬の動きが「速い」のは当然である。たとえ<棒状のもの>をゆっくりくねくねと、もてあそびながら動かしてきたとしても、対象に接触する最後の時には<瞬間的に>ツク。その瞬間には当然<棒状のものを>「まっすぐに速く」動かさなければツクことはできないわけである。

これまで見てきた例は皆、ツク対象の<他のあるもの>をヲ格にとる場合であった。この他にツク道具の<棒状のもの>をヲ格にとる(16)のような例もある。

(16) モリ／ヤリをツク。

これに関し、柴田・国広他(1972:226-227)には次のような記述がある。

サスは、…「何かを何かの中に入れる」という<結果>に注目する語である。これに対し、ツクは動きを問題にし、<動作>にも注目する語である。

このように<動作>にも注目するツクには<動作>だけを表わす用法がある。

13a 武芸者が^{やり}槍で人をツク

b 武芸者が槍をツク

a, b とも槍を勢いよく前方に動かすのであるが、b ではその動きだけをとりあげて表現しているのである。

たとえば武芸者がツク「動き」の練習だけをする場合、槍でツク相手が特にない場合には13bの言い方をすることになるだろう。(16)も同様に、手にしたモリ／ヤリをどうするのか、その「動き」の方に注目し、実際に対象となるものに接触し、衝撃を与えるかどうかについては問題にしない表現だと思われる。これは基本義の意義特徴<他のあるものに><接触させて><衝撃を与える>からは焦点をずらせ

た用法だと考えられる。しかし、ツク動き自体は同じであり、これらの意義特徴が完全に抑圧されて消えてしまったわけではない。あくまで、その動きは、対象に接触してそれに衝撃を与えることを予想させるようなものであることに変わりはない。

ところで、もし「刺す」であったら、

(17) 針山にピンを刺す。

のように、刺した結果ピンが存在するようになる場所を二格で表すことができる。しかしツクの場合は

(18) ?的に竹槍をツク。

とは言いにくい。的に竹槍が突き刺さり、竹槍がそこに存在するようになるという意味を、二格の補語を伴って一語で表すことはできない。そのような場合は次のように言ったほうが自然であろう。

(19) 的に竹槍をツキ刺す／ツキ立てる。

このことから、ツクそのものには、対象に接触した後に、その<棒状のもの><先端>が対象の中に入るのかどうかを特に指定して表す意味はないことがわかる。

(20) 鐘をツク。

(20)がツク動きだけでなく、鐘を鳴らす意味として理解できるのは、そこに推論が働いているからだと考えられる。鐘めがけて撞木でツイたのなら、当然音がする、鳴るはずだという推論は容易に成り立つ。

(21) 思いがけない言葉が口をツイて出た。

(21)は、音声あるいはひと続きの言葉を線状あるいは棒状に連なったものとみな

し、その冒頭部分、つまり<棒状のもの><先端>にあたる部分が、閉じられた唇の裏側という対象物に勢いよく当たるととらえたものであろう。口という対象に<接触し><衝撃を与える>ということを見ると、いきおいその言葉は、ゆっくり吟味し、考えて意識的に出されるものではなく、思いがけない言葉、言おうと思っていたわけではないのに思わず言ってしまうような言葉であることが多い。「ツイて出る」と、この場合非意図的な「出る」という自動詞を伴うことが多いのも、これが意図的な動きではないことを示していると思われる。

2.2 多義的別義[2] : <棒状のもの><先端を><固定した面に><接触させ><ささえにする>

- (22) テーブルにひじをツク。
- (23) 机に頬杖をツク。
- (24) 杖をツイて歩く。
- (25) カクテル光線で鮮やかさを増した芝生に手をついて、室伏はしばらくしゃがみ込んだ。(室伏“世界の壁”15位 95.8.30 中日新聞)

腕、杖などやはり<棒状のもの><先端を><接触させ>ていることは、[1]の基本義と同じである。しかし、その接触する対象物は、テーブル、机、地面、畳、床など固定した面である。また、対象物に何らかの衝撃を与える[1]とは違って、<棒状のもの>を<接触させる>ことによって<ささえにして>いる。特に<ささえにする>ことが目的として意図されていないこともあるが、結果的にはやはり体重や腕の重みがそこにかかることになる。

このように多義的別義[2]は[1]の基本義とその意義特徴の一部が入れ換わったものである。共通部分は<棒状のもの><先端を><接触させる>であり、他の意義特徴は<他のあるものに>が<固定した面に>へ、<衝撃を与える>が<ささえにする>へそれぞれ入れ換わっている。国広(1982:118-119)に従えば、基本義の上位の意義特徴を入れ換えた「基本的比喩」による転用だといえるだろう。また、この[2]は[1]と違って<固定した面>を二格に、<棒状のもの>をヲ格にとって「～ニ～ヲツク」という形をとる。

2.3 多義的別義[3] : <ものごとの成り行きを左右するような重要な点を><ねらって><攻撃する>

- (26) 弱点をツク。
 (27) 意表をツク。
 (28) (ものごとの) 核心をツク。
 (29) 後半9分には、中央からサンパイオが出したパスを受けたジーニョが左サイドから切れ込み、追加点を奪った。ともに相手DFの一瞬のすきを突いたものだった。(横浜F逃げ切る 95.8.17 中日新聞)
 (30) 特に「た」をつけて用いることができるかどうかを「主観的表現」(Modus)対「客観的表現」(Dictum)の判別の基準にしている点などは、本質を鋭くついた分析といえよう。(澤田治美『視点と主観性－日英語助動詞の分析－』ひつじ書房,1993 p.193)
 (31) 「彼等らはTで始まるチャイを飲んでいる。でも僕たちはCのチャイを飲んでいるのさ」その時は笑うだけだったが、あるいは一面の真理をついていたのかもしれない。(沢木耕太郎『深夜特急5－トルコ・ギリシャ・地中海』新潮文庫,1994 p.167)

この場合のツク対象は、弱点、痛いところ、盲点、意表、すき、背後、不意、虚、急所など、攻撃されると弱いところであるように思われる。『日本語基本動詞用法辞典』も「相手の弱いところをねらって鋭く攻める」と、また『新明解国語辞典』も「急所・弱点などを直接攻撃する」と分析している。一方『類語国語辞典』では「目的の場所を目掛けて鋭く攻撃する」、『広辞苑第四版』では「目標を一点に定めはげしく攻撃する、突撃する」と、ツク対象を広く「目標点」とし、その狙ったところが特に相手の「弱点」であるとは分析していない。

ここでは、そのツク対象を<ものごとの成り行きを左右するような重要な点>と分析する。「弱点」としては、(28)(30)(31)に見られる「核心」「本質」「真理」などがおさまりきらない。むしろそれらは、そこを指摘することによって新たな局面が展開されるかもしれない、また今まで闇に隠れていた部分が明らかになるかもしれないという、重大な意味を持つ点であると考えられる。そしてまた、相手の弱点というのも、実は闘争の勝敗を決するような重要な点になり得るものである。よ

って、このくものごとの成り行きを左右するような重要な点>というのは、対象となる相手の「弱点」も含み込むことのできる意義特徴である。

また、それらの重要な点をくねらって>でなければツクことにならない。あいまいに漠然と攻めたり指摘したりするのではなく、その一点だけに集中している。この点は『日本語基本動詞用法辞典』の「ねらって鋭く攻める」、『新明解国語辞典』の「直接攻撃する」、『類語国語辞典』の「目的の場所を目がけて」また『広辞苑第四版』の「目標を一点に定め」という分析と一致する。(32)(33)のように、やはり言いにくい。

(32)? あいまいに本質をツク。

(33)? 漠然と痛いところをツク。

またここでは「攻める」ことも「鋭く指摘する」ことも含み得る<攻撃する>という意義特徴をとることにする。「本質」や「真理」を鋭く指摘することも、それらを明らかにするための一種の攻撃性を持った行動と考えられるからである。

この多義的別義[3]は、くものごとの成り行きを左右するような重要な点をくねらって><攻撃する>という抽象的なことに、具体的なツク動きとの共通性を見出だしたことによって生まれた「比喩的転用」(国広1982:118)であるといえるだろう。その共通の性質というのは、基本義にとっては周辺の特徴である「一点攻撃性」であり、「周辺の比喩」(国広1982:118-119)による転用関係にあるといえる。

2.4 多義的別義[4] : <刺激性の強いある事物が><嗅覚をあるいは心を><刺激する>

(34) におい/悪臭/異臭が鼻をツク。

(35) 郷愁の思いが胸をツク。(インフォーマントの作例より)

(36) 悲しみが胸を鋭く突く。(『日本語基本動詞用法辞典』p.321)

この意味を『日本語基本動詞用法辞典』は「心や感覚器官を強く刺激する」と、『三省堂国語辞典』は「(感覚などを)強く刺激する」と説明している。しかしそ

その他の辞書を含め例文を検討してみると、ツク対象は具体的に（心という意味での）「胸」と、「鼻」のみである。『例解新国語辞典』はこの意味を「鼻や耳をつよくしげきする」としているが、例文には「悪臭が鼻をツク」があるのみで、実際に何かが「耳」をツク例文はない。「心」以外に「感覚（器官）」を刺激するといっても、実際にはその中の嗅覚のみが対象になるものと思われる。以下のうち(38)から(40)はむしろ「刺す」のほうが自然であろう。

- (37)? 鋭い音が耳をツク。(聴覚)
- (38)? まぶしい光が目をツク。(視覚)
- (39)? 香辛料の味が舌をツク。(味覚)
- (40)? 肌をツクような痛さ。(触覚)

また例に挙げられている「胸」というのは、具体的な身体を指すというよりも、その人の「心」を比喩的に表したものと考えられるので、意義特徴には<嗅覚>の他<心>をツク対象に含めることにする。刺激を与えるものは、嗅覚に対しては悪臭、異臭、いやなにおい、「アンモニアのにおい」（『外国人のための基本語用例辞典』p.631）などであり、心に対しては「悲しみ」や「郷愁の思い」などである。まとめると何らかの<刺激性の強い事物>となる。

この多義的別義[4]もまた、基本義の周辺的特徴を取り上げ、それに新しい意義特徴を付け加えた「周辺の比喩」による「比喩的転用」（国広1982:118-119）であると考えられる。刺激臭が鼻にツーンときた時に受ける感じ、あるいは「郷愁の思いが胸をツイた」ときにズキンとくる感覚を、具体的に何か<棒状のもの>で鼻の奥をツカれたような、あるいは胸をツカれたような時に感じるであろう感覚と比べ、その共通性をとらえたことから転用されたと考える。

2.5 多義的別義[5] : <自然現象の悪条件に><負けないで立ち向かう>

- (41) 嵐／暴風／悪天候をツイて出かける／進む。
- (42) 船は嵐をついて出港した。（『日本語基本動詞用法辞典』p.321）
- (43) 父は闇（大雨／吹雪）をついて遭難現場に出かける。（同上 p.321-322）

各辞書の説明を見ると、『日本語基本動詞用法辞典』は「天候などの悪条件にかまわず行動を起こす」とし、『広辞苑』は「物ともせずに進む」、『例解新国語辞典』は「やりにくいことがあってもかまわずにやる」、『三省堂国語辞典』は「ものともせず^ににたちむかう」、『新潮国語辞典』は「しのぎおかす、物ともせず進む」としている。しかしこれらの辞書が説明するように「かまわず、ものともせず～」とすると、悪条件を何とも思わず、そんなことは平気で、という意味にもなってしまう。これは、あくまで「困難な状況ではあるけれども、それにあえて立ち向かっていく」ということを意味していると考えられるので、〈負けないで立ち向かう〉という意義特徴を採用する。その立ち向かう相手は〈自然現象の悪条件〉としてまとめられるだろう。

この場合には「～をツク」の形で終わることはなく、「～をツイて～」というように〈自然現象の悪条件に〉〈負けないで立ち向かい〉「どうするのか」ということを後続の動詞を伴って表す。その自然現象のまっただ中^ににあえて進んでいくことを示すものが多い。

困難なものに〈負けないで立ち向かう〉ということは、たとえば「敵を竹槍でツク」「クジラをモリでツク」というような、具体的なツク動きにも伴われる性質である。基本義のツクにとって周遍的なこの特徴をとらえ、それに新たな意義特徴を付け加えたもので、基本義とはやはり「周遍的比喩」による「比喩的転用」(国広1982:118-119)の関係にあると考えられる。

2.6 多義的別義[6] : 〈息あるいはよくない言葉を〉〈鋭く〉〈口から出す〉

(44) 息をツク。

(45) うそをツク。

(46) すると、そこには酒の瓶が握^{びん}られていた。彼らはそれを高く振りかざすと、自分たちを見ているバスの中の大人たちに向かって悪態をついた。(沢木耕太郎『深夜特急5 -トルコ・ギリシャ・地中海』新潮文庫, 1994 p. 190)

国立国語研究所(宮島達夫)(1972:61-62)は「『息をつく』と『息をはく』は、どちらもつかわれるので、漢字で書いてあると読みわけるのがむずかしいばあいが多い」と指摘している。次の例も漢字を見た限りではどちらの読み方も可能である。

- (47) 私はファックスをベッドの上へ置き、ウイスキー・ソーダを口に含みながら、しばらく部屋の中をうろついていた。あした帰る……急にそんなことを言い出した夢子の気持ちを探ろうとしたが、無駄なような気がした。大きく息を吐いたあと、私はおもむろにベッドの上のファックス用紙をつまみ上げ、大袈裟に宙にかざした。(『夢の通ひ路』村松友視 95.8.31 中日新聞)

しかしながら(47)の場合には「息を吐いた」と読むほうが自然である。「息を吐く」というのは、純粋に生理的な呼吸作用を意味することが多いと思われる。

- (48) 人は呼吸器官の働きによって、息を吐くことができる。
 (49)?人は呼吸器官の働きによって、息をツクことができる。
 (50) (医者が患者を診察しながら)息を吐いてください。
 (51)?(同上)息をツイてください。

「吐く」にそのような意味があるとすれば、小説に描かれている人物が何かに思いを巡らせている(47)の文脈では、単に生理的な呼吸作用を表して「吐く」と読むのではそぐわないというのも納得できる。

この多義的別義[6]も、基本義の中で見られた「言葉が口をツイて出た」という比喩的な表現と同様に、やはり音声や息というものをひと続きの線状あるいは棒状のもの>とみなして生まれた表現だと思われる。ただし基本義の「言葉が口をツイて出る」のほうは、ツク対象が「口」である。これは口、ひいては口の持ち主である話し手自身に対して、その言葉が出ることの衝撃性を表した言い方である。一方この[6]の「息をツク」「うそをツク」の場合は、口の「中」の息や音声を棒状のもの>ととらえているのではなく、唇の間隙から「外」に出た後の息や音声の流れをとらえたものである。「モリ／ヤリをツク」という表現と同様に、この場合の「息／うそをツク」は、そのツク対象を特定したものではなく、棒状のもの>である息、音声の「動き」そのものに注目したものだといえる。

具体的にモリや棒などをツク動きは、瞬間的であるがゆえに速く鋭いものである

が、息や言葉が鋭く発せられることにそれとの共通性を見出だした比喩的表現である。共通の性質として取り出された「動きの鋭さ」は基本義にとっては周辺の意義特徴であるので、この多義的別義[6]は基本義と「周辺の比喩」による「比喩的転用」(国広1982:118-119)の関係にあるといえるだろう。

(52) ?ゆっくり息をツク。

(52)のようには言いにくく、やはり<鋭く>という意義特徴は必要だと思われる。(52)は次のように言うのなら自然である。

(53) ゆっくり息を吐く^は／する。

ただし文脈によってはこの<鋭く>という意義特徴から焦点が外れることもある。

(54) 静かにため息をツイた。

(55) おそろおそろうそをツイた。

しかしどんなに静かにため息をツイても、そのツキ始めの瞬間には息の鋭さはある。また次の(56)は「悪態」という語を伴うその文脈から、(55)の「うそ」などの場合に比べると容認度は低くなる。この場合のツクにはやはり<鋭さ>があるといってよいだろう。

(56) ?穏やかに／?やわらかく悪態をツイた。

2.7 多義的別義[7] : <杵の><先端を><臼にいれた穀物に><何度も><強く当て><殻を除いたりつぶしたりする>

(57) 米をツク。

(58) もちをツク。

[1]の基本義で説明された動きと基本的には同じであるが、ここでは動きは<何

度も>繰り返される。1回だけの動きではこの[7]の意味を表すことはできない。また基本義における<棒状のもの>は<杵>に、また<他のあるもの>は<臼>に入れた穀物>に、それぞれ特定される。単に<衝撃を与える>だけではなく、穀物のコメをツク場合には<殻を取り除いて>精白することを、また精白し炊いたモチ米をツク場合にはそれを<つぶし>てもちを作ることを表す。この時正確には「モチ米をツイて、もちを作る」のだが、行為の結果作り出される対象物の「もち」をヲ格にとり、(58)のように「もちをツク」と言う。水を沸かして湯にする時「湯を沸かす」と言い、地面を掘って穴を開ける時に「穴を掘る」と言う場合のヲ格と同様である。またこのように精白したり、もちを作ったりという目的がはっきりしているため、<杵>は<穀物に><強く当てる>ことが必要である。弱い力での動きを表すものではない。

これは基本義からの「特殊化転用」(国広1982:100,128)だといえるだろう。どんなものでもツク動き一般を表すのが[1]の基本義であるが、杵と臼という道具が用意された場面においてツクといえば、穀物を精白することか、もちを作ることか、どちらかしかない。使用場面が特殊化され、多義的別義として定着したものと考えられる。基本義[1]が動きそのものに注目しているのに比べ、この[7]はその対象物がどうなるのか、動きのもたらす結果のほうに注目しているといえるだろう。

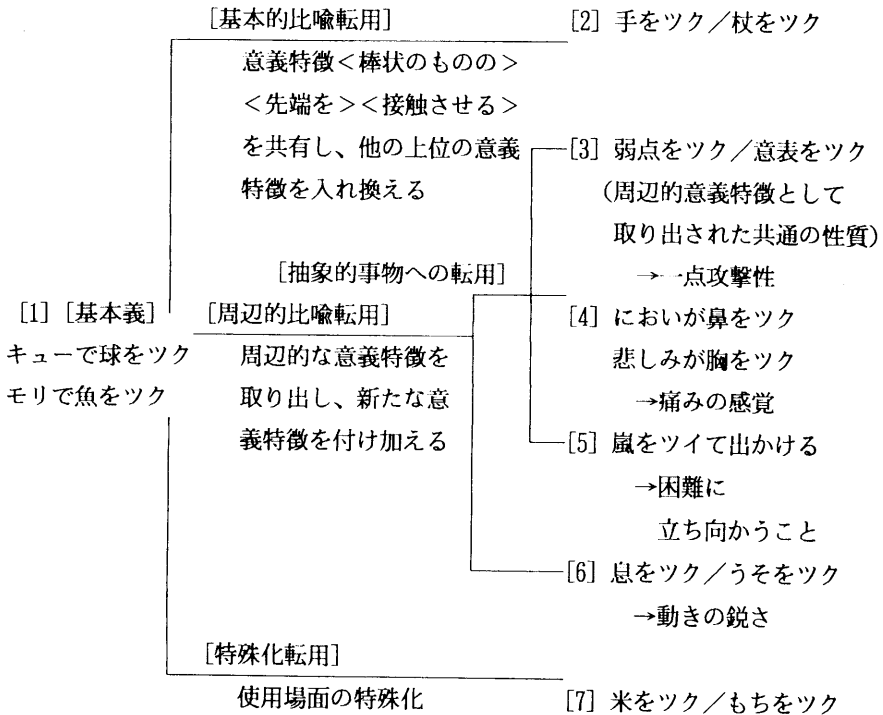
2.8 多義的別義間の関係

以上2.1から2.7でツクの多義的別義を考察した結果、[1]から[7]まで、意味的に関連のある七つの異なる意味が抽出できた。

- 多義的別義[1] (基本義) (例) キューで球をツク/モリで魚をツク
 - <棒状のもの><先端を><他のあるものに><瞬間的に><接触させ>
 - <衝撃を与える>
- 多義的別義[2] (例) 手をツク/杖をツク
 - <棒状のもの><先端を><固定した面に><接触させ><ささえにする>
- 多義的別義[3] (例) 弱点をツク/意表をツク
 - <ものごとの成り行きを左右するような重要な点を><ねらって>
 - <攻撃する>

- 多義的別義[4] (例)においが鼻をツク／悲しみが胸をツク
 <刺激性の強いある事物が><嗅覚あるいは心を><刺激する>
- 多義的別義[5] (例)嵐をツイて出かける
 <自然現象の悪条件に><負けないで立ち向かう>
- 多義的別義[6] (例)息をツク／うそをツク
 <息あるいはよくない言葉を><鋭く><口から出す>
- 多義的別義[7] (例)米をツク／もちをツク
 <杵の><先端を><臼に入れた穀物に><何度も><強く当て>
 <殻を除いたりつぶしたりする>

これらの多義的別義間の関係を整理すると〔図2〕のようになる。



〔図2〕

3 プロトタイプの意味の認定

これまで便宜上、多義的別義[1]を「ツク」のプロトタイプの意味、即ち基本義であるとして話を進めてきたが、ここでその認定についての根拠を示す。

田中(1990:101)は「言語学的な基準に基づく『理論的プロトタイプ』」と「心理学的な基準に基づく『心理的プロトタイプ』」と、二つの異なる観点からの分析が可能であることを示している。また「認知意味論において興味のある問いは、心理的プロトタイプと理論的プロトタイプの間にはどの程度整合性がみられるか、という問題である。言い換えれば、両方向からの分析が必要であり、『理屈ではこうなるはずだが、実際はどうか』といった類の問題を調査していくことになる」と述べている。

ここでは基本的に、言語事実に基づく方法でプロトタイプの意味を考察し、認定する立場をとり、3.1でその結果を報告する。その際援用する言語学的な基準は、田中(1990:101-102)の「動作の『具体性』と『観察可能性』」、および柗山(1995:622)の「多義語の複数の意味のうち、用法上(分布上)制約がない、あるいは相対的に少ないものをプロトタイプの意味と認定し、用法上制約のあるものを非プロトタイプの意味(転義)と考える」というものである。その上で3.2では「心理的プロトタイプ」(田中1990:101)を探るための小実験を行った結果を合わせて報告し、「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」の両者の間にどのぐらいの整合性が見られるかを観察する。

3.1 言語事実に基づく認定

動作を表す動詞のプロトタイプの意味を認定するために、田中(1990:101-102)は「具体性」と「観察可能性」という基準を挙げている。これは具体から抽象へという転用の方向性を考えても納得のいきやすい基準であるといえるだろう。具体的なものごとについての表現が抽象的なものごとの表現に転用されるということに関しては、池上(1975:244-245, 1981:5-8)などにも記述が見られ、普遍的な転用の方向性として認めてよいものと思われる。

また、「用法上の制約の少なさ」(柗山1995:622)については、ツク動作の向か

う対象を名詞句Xで表した「ツイタ(ツイテ～)X」の用法が可能かどうかを中心に検討する。それらの結果を整理したものが以下の〔表1〕である。(表の形式は 羽山(1994:87-88)に従った。)

多義的 別義	動作の具体性	観察可能性	ツイタ (ツイテ～)X	その他 用法上の制約
[1]	○	○	○ キューでツイタ球 モリでツイタ魚	○ (複合語を 生産的に作る)
[2]	○	○	○ 手をツイタ地面 杖をツイタ地面	—
[3]	×	×	△△ ?ツイタ彼の弱点 *ツイタ相手の意表	—
[4]	×	×	×	△ ツク対象は鼻か 胸のみ
[5]	×	×	×	×
			*ツイテ 出かけた嵐	「ツイテ～」の 形のみ
[6]	○	×	△ ?ツイタ息 ツイタうそ	—
[7]	○	○	○ ツイタ米 ツイタもち	△ ツク対象は 穀物のみ

〔表1〕

(X=名詞句、表左の2項目に関しては、○=動作の具体性がある、観察可能性
がある、×=動作の具体性がない、観察可能性がない、「ツイタ(ツイテ～)

X」に関しては、○=その用法が可能、△=その用法が可能な場合と不可能／不自然な場合がある、△△=その用法が不自然な場合と不可能な場合がある、×=その用法が不可能、その他の用法上の制約に関しては×=大きな制約がある、△=いくらか制約がある、- =特でない、○=用法上生産的な面がある、用例に関しては、無印=可能、?=不自然、*=不可能)

具体的な目に見える行為を表しているのは、多義的別義[1]の「キューで球をツク／モリで魚をツク」、[2]の「手をツク／杖をツク」、[7]の「米をツク／もちをツク」である。[6]の「息をツク／うそをツク」は中間的と考えられる。意味の転用の契機となった[6]の「動きの鋭さ」という性質は、息や音声の流れという目に見えないものに対して見出だされたものであり、その動きは観察することはできない。しかし結果的には「息をツク／うそをツク」という動作自体は具体性を持つものになっている。

用法上の制約を見ると、まず[7]の「米をツク／もちをツク」は、それが[1]の特殊化転用であると分析した通り、限られた文脈でしか使われない。[4]の「においが鼻をツク／悲しみが胸をツク」も、ツク動きが向かう対象は鼻か(心という意味での)胸のみである。また[5]の「嵐をツイて出かける」は必ず「ツイて～する」の形をとるといふ、他の多義的別義には見られない大きな用法上の制約がある。ツク動作の向かう対象を名詞句Xで表した場合「ツイタ(ツイテ～)X」の用法が可能かどうか調べると、[1],[2],[7]は問題ない。[3]の「弱点をツク／意表をツク」と[6]の「息をツク／うそをツク」の場合は、不可能あるいは不自然な場合がある。[4]および[5]は不可能である。ここまでの観察では[1]の「キューで球をツク／モリで魚をツク」と[2]の「手をツク／杖をツク」は、どちらも同じように用法上の制約がないということになる。しかしこれら二つの間で唯一異なる点は、2章でも指摘した通り[1]の意味では「ツキ飛ばす」「ツキ出す」「ツキ放す」「ツキ落とす」「ツキ破る」「ツキ刺す」など多数の複合語が生産的に作られるのに対し、[2]の意味ではそのような生産性がないことである。ということは、[1]と[2]を比べると[1]「キューで球をツク／モリで魚をツク」の方が相対的に制約が少ないということになる。

以上の観察より、多義的別義[1]～[7]のうち、具体的で観察可能な動作を表し、かつ用法上の制約が最も少ない[1]の意味<棒状のもの><先端を><他のある

ものに><瞬間的に><接触させ><衝撃をあたえる>を「ツク」のプロトタイプの意味と認定することにする。

3.2 実験に基づく認定

3.1 では言語事実に基づいて多義的別義[1] をプロトタイプの意味と認定した。ここではさらに、それを田中(1990:101)の「心理学的な基準に基づく『心理的プロトタイプ』」の観点から見るとどうなるか、両者の間にずれが生じるかどうかを小実験に基づき観察する。

実験1

インフォーマントは日本語母語話者17名、日本言語文化を専攻する大学院生、および大学院助手である。「～が～をつく」を使って典型的な文を作成するよう依頼し、22例を得た。漢字を示すとある特定の意味を誘発する可能性が考えられるため仮名で表記した。結果は以下の通りである。

・多義的別義[1] (基本義) 6例 (ただし慣用的、派生的用法も含む)

強い一撃が彼のみぞおちをついた	すべってしりもちをつく
子供がさざえをついてとる	お寺の和尚さんが鐘をつく
資金が底をつく	懐かしい歌の一節が口をついて出た

・多義的別義[2] なし

・多義的別義[3] 6例

ふいをつかれてびっくりした	彼のスキをつく
虚をつく	いたいところをつく
その答えは意表をついていた	
オリックスが西武のスキをついて攻撃した	

・多義的別義[4] 6例 (ただし1例は逸脱か?)

においが鼻をつく (2例)	異臭が鼻をつく
くさいにおいが鼻をつく	アンモニアが鼻をつく
?おいしそうな匂いが鼻をつく	

・多義的別義[5]	なし	
・多義的別義[6]	なし	
・多義的別義[7]	4例	
もちをつく		月でうさぎがもちをつく
うさぎがモチをつく		お正月に祖父がもちをつく

この結果を見る限り、母語話者がどのような意味を「ツク」のプロトタイプの意味と考えているか明確な結果が出たとは言い難い。その原因には以下の4点が考えられる。まず、インフォーマントの数が十分でないこと。よって分析対象とする作例が資料的に十分であるとは言えない。次に、仮名表記で「つく」という語を示したことの逆効果。漢字表記から特定の意味を誘発することを避けるのが狙いであったが、逆に慣用句、および漢字表記をするかしないかでゆれのある用法を誘発してしまった可能性がある。三番目に「典型的な」文という意味が的確に伝わらなかった可能性がある。そして最後に、田中(1990:101)の指摘する「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」との純粋なずれの可能性である。

心理学的な基準では「心理的に何が顕著であるか(連想喚起力)」が問題になる(田中1990:101)とされている。実験によって心理的に連想喚起力の高い「心理的プロトタイプ」が得られた時、それが言語学的事実に基づいたプロトタイプと異なっていたなら、その場合、理論的プロトタイプと心理的プロトタイプの間にはずれがあるということになる。ここでは、3.1でプロトタイプ度が最も高いと認定された基本義[1]と同じ作例数を示す[3]「不意をツク/スキをツク」、および[4]「においが鼻をツク」の意味が心理的プロトタイプ度が高い可能性がある。この二つの意味は抽象的な動き・作用を表したもので、3.1では動作の「具体性」「観察可能性」という基準からプロトタイプ度は低いであろうと判断したものである。またこれらは「ツイタX」というツク対象を修飾する形にできない例があり、用法上の制約という点からも、プロトタイプ度は高くないと考えられた。これら[3],[4]の心理的プロトタイプ度が高いということになれば、3.1の結果とは一致していないことになる。また、[2]の「手をツク/杖をツク」はその動作の具体性と観察可能性および「ツイタX」が可能なることにより、3.1ではプロトタイプ度は相対的に高いとみなされたものだが、この実験においては1例も出なかった。

さらに[7]の「もちをツク」はツク対象が穀物に限られており、用法上には制約

がある。にもかかわらず、比較的作例が多かった。これは田中(1990:103, 116)の指摘する「項目としてのプロトタイプ(範例)」であると考えたほうがよいかもしれない。即ちこの場合、<杵の><先端を><臼に入れた穀物に><何度も><強く当て><殻を除いたりつぶしたりする>という「概念」のプロトタイプ度が高いわけではなく、「もちをツク」というこの用例そのものが、話者の意識にのぼりやすいものであることが考えられる。話者の意識にのぼりやすいことの要因として田中(1990:116)は「使用頻度などに影響を受けて」を挙げている。「もちをツク」の場合、その項目としてのプロトタイプ度が高くなる要因としては、基本義からの特殊化転用であるため文脈の固定した表現であること、さらに「月ではウサギがもちをツイている」というような民間の言い伝えの中で成句として使われるため、馴染みのある表現であることなどが考えられる。

実験2

インフォーマントは日本語母語話者22名(うち日本語教育に携わる者が5名)、年齢は60代が3名の他は20~30代。ここでは、特定の意味と結び付いた漢字表記「吐」と「搗」および特定の意味と結び付きやすい「撞」を除き「~が~をつく(突く/衝く)」の形で、思い付くままに文を2~3例作成するよう依頼し、合計66例を得た。

ここでの狙いは [1]「キューで球をツク/モリで魚をツク」と [2]「手をツク/杖をツク」の多義的別義のうち、どちらがプロトタイプ度が高いかを調べることである。[1]と [2]は、ともに具体的で観察可能な動作を表し、どちらもツク動作の向かう対象をXとして「ツイタX」という名詞修飾表現を作ることができるため、3.1の考察では双方ともプロトタイプ度は比較的高いと見なされたものである。複合語を生産的に作るかどうかによって最終的に [1]をプロトタイプの意味と判断したが、これが心理的プロトタイプと一致するかどうか確認してみたい。また、これは田中(1990:105-106)に引用されている実験例とその解釈に従い、産出される頻度の高さとプロトタイプ度との間には高い相関性があるとの前提に基づいた実験方法である。田中(1990:105-106)の引用した実験では、できるだけ多くの文を作成してもらう方法をとっているが、ここではインフォーマントを一堂に集めて一斉に実験を行うことは不可能であったため、作成依頼数を限らざるを得なかった。結果は以

下の通りである。

- 多義的別義[1] (基本義) 33例 (ただし慣用的、派生的用法を含む)
 - キューで (ビリヤードの) 球を突く(4例)/つく(1例)
 - 漁師がもりで魚を突く(3例) 槍で～を突く(2例)/つく(1例)
 - 犯人は傘で袋を突いてサリンを流出させたそうだ
 - おしゃべりをしていたら先生にコツンと頭をつかれた
 - 傘で地面を突く ひじで胸を突く
 - 指で目を突く 針で指を突く
 - 指をつく 背中をつく
 - 友人の肩を突いて振り向かせた (棒の先で) 玉 (ボール) をつく
 - (竹刀・刀で) 胸をつく 竹刀でのどをつく
 - 闘牛が人の尻を突く 角^つで突く
 - (むいた) 梨をようじでつく きつつきが木をつく
 - ところてんをつく まりをつく
 - 鐘をつく 怒髪天を衝く
 - ことばが口をついて出る 意外な言葉が口を衝く
- 多義的別義[2] 5例
 - つえをつく(2例)/突く(1例) ひじをつく
 - 手をついて逆立ちをする
- 多義的別義[3] 21例
 - 意表をつく(2例)/突く(2例)/衝く(1例) 彼の言動は意表をついた
 - 不意をつく(4例)/つかれた(1例) 虚をつく(2例)
 - 弱点をつく 痛いところをつく(1例)/突く(1例)
 - ポイントをつく(1例)/突く(1例) 敵の背後を衝く
 - 彼女の話は問題の急所を突いている
 - この攻撃は相手の弱点を突いた形となった
- 多義的別義[4] 2例
 - 郷愁の思いが胸をつく (いやな臭いが) 鼻をつく
- 多義的別義[5] なし
- 多義的別義[6] 2例

嘘をつく

ため息をつく

・多義的別義[7]

3例

もちをつく(3例)

結果は [1]の産出される頻度が最も高く、これがプロトタイプ度が最も高いと考えられ、3.1 で考察した理論的プロトタイプと一致することになった。一方、[2]の「手をツク／杖をツク」の作例数は少なかった。実験1でも [2]は作例数がゼロであったことを考えると、その動作の具体性、観察可能性にもかかわらず、この意味の心理的プロトタイプ度は低いと言ってよいかもしれない。また、実験1に比べ [4]の「においが鼻をツク」などの例がかなり少なくなっているのは、話者の間にこれを「突く／衝く」の漢字で表記しないという意識があるためかと思われる。実験1でも作例数の比較的多かった [3]「不意をツク」などは、ここでもまた多数の作例を得ている。この [3]はその意味が抽象的な動きを表すものであるにもかかわらず、心理的プロトタイプ度は高いと言ってよいかもしれない。[5]の「嵐をツイて出かける」の意味は、双方の実験を通じて1例も現れなかったことになり、心理的プロトタイプ度は最も低いと考えられる。これは動作の具体性、観察可能性がなく、他の多義的別義にはない「ツイて～」の形しかとらないという用法上の制約もあるため、3.1 でもプロトタイプ度は最も低いと考えられたが、その結果と一致している。

これらの小実験の結果は、以下のようにまとめられる。まず、3.1 で理論的なプロトタイプを考察する際その基準として採用した、動作の「具体性」および「観察可能性」があり、また「用法上の制約」が相対的に少ないにもかかわらず、即ち理論的にはプロトタイプ度が高いにもかかわらず、心理的にはプロトタイプ度が低いと考えられる意味があること ([2]「手をツク／杖をツク」)。また逆に動作の具体性、観察可能性がなく、用法上の制約があるにもかかわらず、即ち理論的にはプロトタイプ度が低いにもかかわらず、心理的にはプロトタイプ度の比較的高いと考えられる意味があること ([3]「弱点をツク／意表をツク」および [4]「においが鼻をツク」)。心理的プロトタイプ度の比較的高い意味の中には、「項目」としてのプロトタイプ度が高いと考えられるものがあること ([7]「もちをツク」)。そして最もプロトタイプ度が高いと判断した意味については、理論的、心理的ともに一致していたこと ([1]「キューで球をツク／モリで魚をツク」)。そして最もプ

ロトタイプ度が低いと判断した意味についても、理論的、心理的ともに一致していたこと（[5]「嵐をツイて出かける」）である。

参考文献

- 池上嘉彦（1975）『意味論』 大修館書店
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 国広哲弥（1982）『意味論の方法』 大修館書店
- 国立国語研究所（宮島達夫）（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- 柴田 武・国広哲弥・長嶋善郎・山田 進・浅野百合子（1979）『ことばの意味2』 平凡社選書
- 田中茂範（1990）『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 三友社出版
- 梶山洋介（1992）「多義語の分析－空間から時間へ－」カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島 央・藤原雅憲・梶山洋介編『日本語研究と日本語教育』 名古屋大学出版会 pp.185-199
- 梶山洋介（1994）「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』（第2号） 名古屋大学留学生センター pp.65-90
- 梶山洋介（1995）「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際－意味転用の一方向性：空間から時間へ－」『東京大学言語学論集』14 東京大学文学部言語学研究室 pp.621-639
- 梶山洋介（1995）（講義ハンドアウト）「現代日本語学概論－意味論・文法論の諸相 2.多義語 2.6.多義語分析の方法」 名古屋大学
- 大野 晋・浜西正人（1993）『類語国語辞典（第七版）』 角川書店
- 金田一京助・柴田 武・山田明雄・山田忠雄編（1989）『新明解国語辞典（第四版）』 三省堂
- 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田 武・飛田良文編（1992）『三省堂国語辞典（第四版）』 三省堂
- 小泉 保・船城道雄・本田昂治・仁田義雄・塚本茂樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店

新村 出編 (1991) 『広辞苑(第四版)』 岩波書店

西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 (1994) 『岩波国語辞典(第五版)』 岩波書店

林 四郎・野元菊雄・南不二男・国松 昭編 (1990) 『例解新国語辞典(第三版)』 三省堂

久松潜一監修 (1980) 『改訂 新潮国語辞典』 新潮社

文化庁 (1990) 『外国人のための基本語用例辞典(第三版)』 文化庁

増田 綱 (1974) 『新和英大辞典(第四版)』 研究社

(すずき ともみ 日本言語文化)